

欧米からの旅行者が体験した明治時代の宇治 —文化的景観という観点

野 口 祐 子

序

現在、日本では文化財保護政策の一環として、一点一点の文化財の保護のみならず、一定地域の生活・生業・風土を包括した、面での保護を目指すようになってきている。国が主導する保護のあり方のひとつである「文化的景観」は、文化庁によれば「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの（文化財保護法第二条第1項第五号より）」と定義される。2015年1月26日現在、全国で47件の「重要文化的景観」が選定されているが、これは2004年から「文化財保護法の一部改正によって始まった、新しい文化財保護の手法」と説明されている。その中に「宇治の文化的景観」も含まれる^①。また現在、宇治の茶に関する景観と茶産業の歴史は「日本茶800年の歴史散歩」として「日本遺産」に登録されている（2015年登録）。文化庁ホームページによれば、2015年から設けられた日本遺産は以下のように定義されている。「地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産（Japan Heritage）」として文化庁が認定するものです。ストーリーを語る上で欠かせない魅力溢れる有形や無形の様々な文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内だけでなく海外へも戦略的に発信していくことにより、地域の活性化を図ることを目的としています。」^②。その場所が持つストーリーを重視する「日本遺産」において評価されたように、宇治・山城一帯は、古代からその歴史を語り起こすことのできる、奈良と京都の文化と深く関わり、それを支えた土地であった。

「文化的景観」は景観保護の認識が高まって以降に流通してきた比較的新しい概念である。しかしながら、欧米人による明治日本の旅行記には、たとえ「文化的景観」あるいはそれに類する表現が用いられていなくとも、彼らが訪れた土地を「文化的景観」として把握していたと考えられる記述がある。本稿では宇治に関する記述を取り上げて、明治時代の欧米人旅行者のまなざしによって捉えられた宇治の文化的景観としての様態と、彼らのそれらへの反応を考察する。本稿では特に茶畑の景観がどのように評価されたかに注目する。明治時代の欧米人旅行者の体験は、かつてそこに生きた人々の周りにあまりにも日常的に存在したために、その価値に気づかれない

うちに、すでに失われてしまった景観や習慣とその意義に気づかせてくれるという点でも貴重なものである。また彼らの体験は、当時の宇治とその周辺を知る貴重な手がかりを提供すると同時に、今日において旅行者が文化的景観として宇治を体験するモデルとなるのではないかと考えるので、その点についても触れたい。

1 旅行記に見られる「茶」のイメージ

明治時代も 1870 年代になると、外交官やお雇い外国人以外の欧米からの旅行者が「内地旅行免状」を取得して京都を訪れることが以前に比べて容易になった（長谷川 62、野口 132）。彼らは、つい最近まで日本の首都であり、多くの歴史的事件の現場ともなった都市として京都を見た。また訪れるべき神社仏閣が多くある土地であり、美術工芸の生産地としても京都を認識していた。欧米からの旅行者は、古き日本を体現する都市、急速に欧化する東京と対照的な都市として、京都に憧れを抱きつつ訪れたのだった。彼らの多くは京都で数日を過ごした後、やはり古い日本を体現する奈良へ向かい、一兩日を過ごして京都に戻る、あるいは大阪へ向かうのだった。

京都から奈良へ向かうには、奈良街道を人力車で行くのが一般的だった。その道中にある宇治川のほとりは、京都を朝発てば昼に一服するにちょうどよい時間に着く。そのため宇治は、欧米人旅行者が昼食を取り休憩する場所として人気であった。明治時代になって、茶が有力な輸出品となると、宇治・山城では山の斜面を利用した茶畑面積の拡大があった。そのため、奈良街道を伏見から宇治へ向かう旅行者は、平地だけでなく周囲の山一面に広がる茶畑の景観を目にすることになった。欧米人旅行者にとって宇治といえば「茶」のイメージは定着していたようである。彼らの旅行記には、宇治が高級茶の産地であること、茶の生育環境、茶の生産と出荷等についての詳しい説明が散見される。随行した通訳による説明の場合も、すでに出版された旅行記やガイドブックから得た知識の場合もあるだろうが、茶に大いに関心を持った記述が見られる。イギリスがインドで茶の大規模なプランテーション経営を本格化させたのが 19 世紀後半であり、紅茶の価格が下がり一気に国民的飲み物となった時代であった。明治時代初期から中期に日本を訪れたイギリス人には、茶という植物も茶の栽培・製造法もたいへん興味をそそられるものであったと考えられる。イギリスの読者を想定した旅行記で茶に関する記述が詳細になっても不思議ではない。

奈良へ行く途上、宇治の茶屋で一服して茶を飲むという経験をした比較的初期の旅人のひとりがイギリス人旅行家のイザベラ・バード (Isabella Lucy Bird 1831-1904) である。彼女は 1878 年 5 月来日、東北地方を縦断し北海道に至った。京都には 10 月中旬から 11 月上旬まで滞在し、東京に戻った後、同年 12 月に横浜からマレー半島へと旅立った。*Unbeaten Tracks in Japan* はスコットランドに住む妹に宛てた書簡と覚書の体裁で書かれた詳細な旅行記で、当時の日本の姿が生き生きと伝えられている。その「第 55 報」(1878 年 11 月 5 日) で、バードは宇治橋周辺の

景観に魅了される。特に彼女を惹きつけたのは茶畑の景観ではなく、茶屋の佇まいだった。バードが京都を訪れたのは、イギリスで日本の美術・室内装飾が流行し始めた時代であり、バードの以下の記述にも「ジャポニズムのまなざし」と呼ぶべき美の捉え方が現れている。当時の「ジャポニズム」的表現をみるために原文を引用する。

We crossed the broad Ujikawa, which runs out of Lake Biwa, by a long and handsome bridge, and went as far as the pretty little town of Uji, which has some of the loveliest tea-houses in Japan, hanging over the broad swift river, with gardens and balconies, fountains, stone lanterns, and all the quaint conventionalities which are so harmonious here. These tea-houses are ceaselessly represented by Japanese art, and if you see a photograph of an ideal tea-house, you may be sure it is at Uji. We got an exquisite upper room in one of them for lunch, looking up the romantic gorge through which the river cuts its way from Lake Biwa, and over a miniature garden lighted by flaming maples. It was altogether ideal, and I felt that we were coarsely real and out of place! I had not before seen a European man in one of these fairy-like rooms, and Mr. Gulick being exceptionally tall, seemed to fill the whole room, and to have any number of arms and legs! I knew that the tea-house people looked at us with disgust. (255)

美しい宇治橋を渡って、「こぢんまりと綺麗な」宇治の町に到着し、昼食のために立ち寄った宇治川のほとりの茶屋は、こぎれいな庭のある、宇治川の眺望も開けた、イギリスでもよく日本の芸術や写真で目にするような趣のある茶屋で、それを「理想的な」「おとぎの国のような」美しさとバードは見なした。そうした紋切り型の表現を意識的に用いているところには、当時のジャポニズム・ブームから少し距離をおいて見るまなざしも感じられる。自分たちイギリス人・アメリカ人はそれと不似合いな、現実的で無骨な西洋人として、茶屋の人たちから軽蔑されていると冗談めかして、小作りで端正な日本の美を強調している。

冷静な観察眼と事実根拠とした記録を信条とするバードは、この引用の後に続けて、茶の木とその日本における歴史の概略、生産量・輸出量、高級茶の価格は非常に高い、などと紹介している。訪れたのは可憐な茶の花が咲く季節で、宇治は日本で最も有名な茶の産地であり、全国で茶の栽培が盛んとなりアメリカ向けに横浜港から大量に輸出されていること、正しく淹れた茶は麦藁色 (pale straw colour) で、繊細でおいしい (delicate and delicious)、という体験から得られた観察もある (256)。バードは日本の各地の茶店で一服するたびに茶を飲んで、日本茶がもたらす爽快感を愛でている。

ではバードが旅した宇治にはどのような景観が広がっていたのだろうか。15年の開きがあるので、茶畑景観に変化があった可能性はあるが、1893年の、やはり秋に同じルートを旅した旅行記から補ってみよう。次に取り上げるヨゼフ・コジェンスキー (Josef Kořenský 1847-1938) は、

ボヘミア（当時はオーストリア・ハンガリー帝国の一部だった現在のチェコ共和国にあたる）の教育者である。1893年に友人と世界周遊旅行に出発し、日本には9月29日から5週間滞在している。日本に関する旅行記『ジャポンスコ』（*Žaponsko*, 1895年、プラハ刊）はチェコ語から英語に翻訳されて2013年にカレル大学から出版された。その英語訳の宇治に関する記述を考察する。

コジェンスキー一行は1893年10月27日、京都から奈良へ人力車で移動し、茶畑が広がる景観に魅了される。こぎれいな茶屋で、歴史を感じさせる茶畑の景観を眺めながら、高級宇治茶を賞味する。ここには旅の満足の要素である美しい景観を愛でる、歴史・物語に触れる、産業を知る、気持ちのよい休息を取る、名物を味わう、という体験がすべて揃っている。以下、拙訳で引用する。文中の「あなたたち」というのはボヘミアの友人を想定している。

「奈良への道はとても美しい田園地帯だ。竹林を過ぎると、日本で最高の茶を産する茶園が続く。一番有名なのは、人力車で約16キロ走った宇治にある茶園である。

宇治は宇治川沿いにある。宇治の住民は茶の栽培に多くの時間と労力をかけ、最高品質の高価な茶を市場に出荷している。宇治川のほとりの茶屋でこの茶を味わった。その小さな庭からは、宇治川の流れと見渡す限り茶の栽培された平地や丘の斜面を見晴らせる。夏になると京都から新茶の味を楽しもうと人々が宇治に押し寄せる。この茶屋の主がこの小さな庭をどんなに巧みに魅力的な場所に仕つらえたか、あなたたちにも見せたいものだ。大小の石を大胆に組み合わせ、シダ・ソテツ・ツツジ・ツバキ・低いマツやモクレンを配し、美しい草木が植えられ、庭の至るところに石灯籠があり、金魚や山椒魚や亀のいる小型の池には小さな橋が渡してある。

この詩的な休息の場から私たちは、何世紀もの間、茶が栽培されてきた景観を見渡した。茶は伝教大師によって中国から日本に伝えられたといわれている。〔中略〕何世紀にもわたって茶の栽培者は繊細な風味の茶を改良してきて、今では1ポンドの玉露は10円つまり15グルデンもする。このブランドは宇治から明治天皇の宮廷にも納められる。〔中略〕一番茶摘みの約一ヶ月前から、霜害を防ぐために茶園は簾（reed roofing）で覆われ、〔中略〕摘まれた葉は蒸されて柔らかく香ばしい香り（delicious aroma）を放つ。』（英語訳 pp. 387-88 からの拙訳、（ ）内の英語は原文より引用）

ここには宇治での旅の体験が凝縮されている。宇治川のほとりの茶屋で宇治茶を味わうというのはバードと同様の体験であり、コジェンスキーも茶屋の庭を日本的な美の表現として捉えている。その茶屋からは「見渡す限り」の茶畑の景観が楽しめた。また宇治の新茶が京都の人々に愛されていること、茶の歴史、高級宇治茶が高価で貴重な茶であること、茶の木を覆うなどして茶生産に細心の注意が払われることが指摘されている。コジェンスキーによる宇治の記録は、まさに今日の「日本遺産」がうたう土地のストーリーを形成している。プラハからの旅行者は、宇治

を単に風光明媚な土地として見るのではなく、文化的景観として体験しているのである。

宇治の文化的景観の中で覆下栽培の景観は宇治の特徴として旅行者の関心を引いた。ここでもうひとり取り上げる旅行者は、コジェンスキーと同時期に日本を訪れたイギリス人画家のパーソンズ (Alfred William Parsons, 1847-1920) である。彼の旅行記 *Notes in Japan, with Illustrations by the Author* (1896) には画家自身の手による挿画が幾葉も見られ、画家が当時の日本のどういうところに惹かれたかがよくわかる。パーソンズは人々の身近にある植物に特に関心を寄せて描いているが、その中で宇治の茶摘みの様子と、摘んだ葉を運ぶ女性の姿、そして覆



下栽培の3枚が宇治茶の景観として描かれている。

“A plantation covered with matting near Uji.” *Notes in Japan*, p. 47.

パーソンズはここに挙げた挿画で覆下栽培を描いている。覆下栽培については以下のように説明される。

The plants which produce the most expensive teas, costing from six to eight dollars a pound, are carefully protected by mats stretched on a framework of bamboo, so that the tender leaves may neither be scorched by the sun nor torn by the heavy rains, and there are acres of them so enclosed. It was a curious thing to look down from a little hill-top on a sea of matting which filled the whole valley from one pine-clad hill to another, its surface only broken by the ends of the supporting poles and by the thatched roofs of the drying-houses which stuck up here and there like little islands. Underneath the mats women were picking, and in every wayside cottage those who were not in the fields were busily sorting and cleaning the leaves. There are no large factories or firing-houses; each family makes its own brand of tea, labelling it with some fanciful or poetic name, such as “jewelled dew.” (47-48)

「1ポンド（約454グラム）が6～8ドルもする最も高価な茶を産する木は、若芽が日差しと

大雨で傷まないように竹竿の枠に箆を上げて覆い、入念に守られる。そのように覆われた茶畑が何エーカーも続く。松に覆われた丘と丘の間の谷一面がまるで箆の海のように覆われているのを丘の上から見るのは面白かった。海のところどころが竹竿の端や、あちこちに小島のように頭を出している乾燥小屋の茅葺き屋根で途切れている。箆の下では女たちが茶摘みをしており、道端の小屋という小屋では、野に出ていない者たちがみな茶葉を選び分けきれいにするのに忙しくしていた。大きな茶製造工場といったものはない。各農家が自前の茶を生産し、「玉露」といった詩的な名前のラベルを貼って出荷するのだ。」(拙訳)

パーソンズの旅行記に見られる、覆下栽培で高級茶を産する土地という宇治イメージは、他の旅行記にも顕著であり、記述の詳しさが示す各著者の関心の高さは注目に値する。以下、2つの旅行記を考察する。

エリザ・R・シドモア (Eliza R. Scidmore 1856-1928) はアメリカの地理学・東洋研究者、女性初の米国地理学協会理事であった。ワシントンのポトマック川畔に日本の桜を植える運動に尽力したことで知られる。引用する *Jinrikisha Days in Japan* は長期滞在を含む1884年から1902年までの日本経験の記録であり、どの時点での体験かは明示されていない。その第31章「宇治から奈良へ」でシドモアは、一面が茶畑の景観を目にしなが、茶摘みの季節のいきいきとした様子を楽しむ。また高級茶の覆下栽培も紹介している。

... we came out on the plain beyond Fushimi; then an irregular, hilly country, green with ancient pine and bamboo groves, every open valley and hill-side set with low, green mounds of tea-bushes; sandy, white roads, clear rushing streams, and we were in the heart of Uji, the finest tea district of Japan.

Groups of bobbing hats beside the tea-bushes, carts loaded with sacks and baskets of tea-leaves; trays of toasting tea-leaves within every door-way, a delicate rose-like fragrance in the air, women and children sorting the crop in every village; and this was the tea season in its height. Here were bushes two and three hundred years old yielding every year their certain harvest, and whole hill-sides covered with matted awnings to keep from scorching or toughening in the hot sun those delicate young leaves, which are destined to become the costly and exquisite teas chosen by the sovereign and his richest subjects. (307)

「伏見を過ぎるとマツの古木や竹林で緑なす起伏に富んだ田園地帯となり、開けた谷や丘の斜面のいたる所が茶の山となっている。砂で白っぽい道や澄んだ急流を越えて、日本の最高級茶の産地である宇治に着いた。

茶畑では幾つもの菅笠 (hats) が上下している。荷車には茶葉でいっぱい袋が山積みだ。どの家でも戸口で茶葉を熟しており、繊細なバラのような香りが広がっている。どの村でも

女子供が茶葉の仕分けに忙しい。今はちょうど茶摘みの盛りの季節なのだ。ここには樹齢二百年の茶の古木から毎年一定の収穫があり、その柔らかい新芽が太陽の熱で灼けて硬くならないよう、丘全体に筵の覆い (matted awnings) がかけられる。その茶葉は、高価な極上の茶となって、天皇や上流人に選ばれるのだ。」(拙訳)

上の記述で茶の木は古いほど価値があるように扱われている。ここにも歴史の重みを重要視する視点が感じられる。ここにある“trays of toasting tea-leaves”とは焙炉のことだろうか。また茶葉の処理の段階で「繊細なバラのような香り」(a delicate rose-like fragrance in the air) が茶農家の戸外にまで漂っているという。これについては、宇治茶を製造販売されている茶園経営者から、現在の宇治茶の生産では一般に行われていない萎凋のことではないかという指摘をいただいた⁽³⁾。昔は宇治茶も微発酵過程である萎凋をさせていた可能性があるという指摘である。つまりシドモアがいう「繊細なバラのような香り」は、少し萎凋させて紅茶のように香りを生み出す過程であったのかもしれない。シドモアの宇治体験にも、産業としての宇治茶への高い関心を見出せる。

イギリスの写真家であるハーバート・ポンティング (Herbert George Ponting 1870-1935) は、1910-1912年、イギリスのスコット南極探検隊に同行し記録写真を撮ったことで当時は有名であった。1901-1906年の間、延べ約3年間の日本滞在経験がある。1910年に日本についての写真付き旅行記 *In Lotus-Land Japan* を出版した。京都では寺社や並河靖之をはじめとする工芸家を精神的に訪問しており、保津川下りも複数回楽しんでいる。旅行記の第15章「宇治と蜚」では宇治茶、茶畑と田園の景観、覆下栽培と、宇治川の「蜚合戦」の紹介が主である。

The country round about Uji is the most famous tea-growing district in Japan; every hill-side near the little town is covered with this, the most highly esteemed of all Japanese shrubs. [...]

At the end of April, and during the early part of May, when the 'first picking' of the leaves takes place, the country-side of Uji presents a most extraordinary appearance, entire hill-sides being completely covered in with grass matting to preserve the delicate young shoots from injury by the heat of the sun. The tenderest leaves of the new shoots produce the choicest tea. [...]

The tea-bushes are grown in rows; if on a slope the hillside is terraced. The shrubs are not allowed to attain a greater height than three or four feet, though some of them, it is said, are double centenarians. (68-69)

「宇治の周辺は日本で最も有名な茶の産地である。宇治の丘という丘は日本の最も貴重な低木で埋め尽くされている。[中略]

4月の終わりから5月初旬にかけて、茶葉の「一番摘み」が行われる季節になると、宇治

の一带は驚くべき姿となる。若芽が日光の熱で傷まないように、丘一面が筵で完全に覆い尽くされるからだ。この新芽からは最上級の茶が作られる。[中略]

茶は畝状に栽培される。傾斜地であれば段々畑にする。茶の木は樹齢 200 年を越えるといわれるものもあるが、3～4フィートに剪定される。」(拙訳)

ポンティングも丘の斜面が茶の木で埋め尽くされている景観と、茶摘み前に筵で一面が覆われる景観に注目し、茶の古木を貴重なものと見なしている。ここでも覆下栽培が宇治茶景観の特徴とされている。

もうひとつ、この旅行記で注目されるのは6月に行われる宇治川の「螢合戦」である。その日には見物客用に京都と大阪から特別列車が仕立てられたという。ポンティングは無数のホテルが乱舞する魅惑的な光景を3頁にわたって描写している(72-75)。その筆に描かれる螢の数は尋常ではない。ポンティングは来日の数年前にジャワ島で見た螢の乱舞に勝るとも劣らないと述べている。これは江戸時代初期(1658)に出版された京都名所記である『洛陽名所集』「橋姫」の段にも記述のある宇治川の名物であった⁽⁴⁾。「螢合戦」がポンティングの来日時には大勢の人が詰めかける行事としてあったことがわかる。

2 ガイドブックの中の宇治

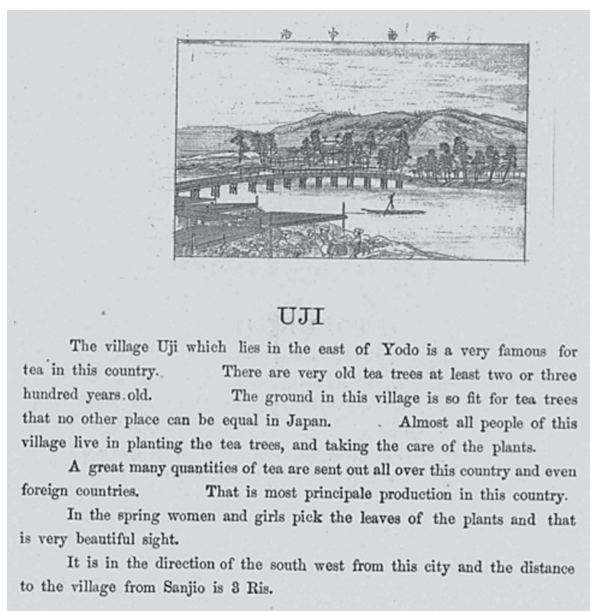


『宇治川兩岸一覽』(1861) 下巻扉絵
(京都府立総合資料館蔵)

宇治の代表的景観が覆下栽培であったことは、欧米人の旅行記に読み取れた。このことは江戸時代末期の名所案内からもわかる。下の図は『宇治川兩岸一覽』(1861) 下巻扉絵である。宇治のイメージとして幕末の名所案内の扉絵に用いられた覆下栽培は、明治時代初期に京都を訪れた欧米人旅行者も目にすることができた景観であり、その主要な宇治イメージとなった。

覆下栽培は、明治時代初期に欧米人読者を意識して京都で編纂されたガイドブックの中の宇治イメージにも取り入れられている。山本覚馬編『京都とその周辺の名所案内』(*The Guide to the Celebrated Places in Kiyoto & the Surrounding Places for the Foreign Visitors, Kiyoto: Niwa, 1873*) は第二回京都博覧会(1873年、御所で開催)時に来京する外国人向けの京都ガイドブックである。全部で46箇所が取り上げられ、各名所に1ページが割かれている。その中の1箇所として宇治が選ばれている

のだが、「宇治」は平等院ではなく宇治茶を中心に紹介されている。茶栽培に適した土地、樹齢二三百年の茶の木、宇治の里人は茶の栽培に専念、茶は日本の主力輸出品、春には女性たちが茶摘みをする美しい光景が観られる、といった記述は、前掲の欧米人旅行者が認識した宇治の文化的景観と同様である。「宇治」のページに添えられた図もまた、宇治川沿いの覆下栽培を描いている。



‘UJI’ in 山本覚馬編 *The Guide to the Celebrated Places in Kiyoto & the Surrounding Places for the Foreign Visitors* (1873) (京都府立総合資料館蔵)

1873年という明治も早い時期に、京都博覧会のために特別許可を取って外国人を入京させた山本、丹羽圭介たちは、欧米人を意識してこの英語ガイドブックを作った。そこに描かれた宇治は、欧米人に知ってほしい宇治であったはずだ。それは茶の宇治であり、前掲の旅行記でも明らかなように、宇治川と覆下栽培の茶畑という、当時は宇治の代表的な景観として、訪れる欧米人の目に触れるべき景観であった。

イギリスで出版されたマレー社の『日本旅行案内』(*A Handbook for Travellers in Japan*) 第5版(1899)でも、宇治はまず宇治茶の産地として紹介されている。覆下栽培への言及はない。平等院については主に、鳳凰堂が唯一創建当時から残る美しい建築であるが、放置されているために傷みが激しいことと、源頼政が自害した地としてその悲話が紹介されている。ここでも場所の歴史とストーリー性が重視されているといえる。『日本旅行案内』は1891年から1913年第9版まで改訂を重ね、欧米人に広く利用されたガイドブックで、編集者はバジル・ホール・チェンバレンとW・B・メイソンであった。日本で長年研究生活を送ったチェンバレンが中心的役割を

果たしたと考えられる。

『日本旅行案内』ではどのような宇治体験が推奨されているか見てみよう。「宇治」の項では宿泊・休憩施設として宇治川の京都側にあった万屋と、対岸の菊屋が推奨されている。先ほど引用したコジェンスキーが休んだ茶屋も、おそらく欧米人がよく利用したこれらの茶屋の一つであろう。『日本旅行案内』第5版(1899)では京都から奈良への移動は鉄道を使うのが一般的だとしている。

The usual way of doing Nara is to take it as a day's expedition from Kyōto, the train journey occupying 2 hrs. each way. Another plan is to go on from Nara by train to Ōsaka and Kōbe ($2\frac{1}{2}$ hrs.). In fine weather, a pleasant break may be made on the way from Kyōto to Nara by alighting at the intermediate station of *Kobata*, 30 min., where jinrikishas are taken to visit Ōbaku-san and Uji, the train being rejoined at Uji Station. (387)

天気がよければ列車を木幡で降りて、人力車で黄檗の万福寺を訪れた後、宇治へと向かうことが推奨されている。これは木幡から宇治橋への茶畑の景観を楽しむためであろう。「Uji」の項に、“A pleasant ride of $\frac{1}{4}$ hr. takes one from Ōbaku-san to the Uji bridge, passing by some large powder magazines and through the tea plantations for which this district is famous.” (388) とあることでもそれはわかる。この時点では宇治に立ち寄るには人力車が有効だった。奈良鉄道の京都—奈良間は1896年に全通しているが、人力車の旅もまだ一般的だったのだろう。

ではいつごろから京都—奈良間で人力車を利用することが一般的でなくなり、欧米人旅行者が宇治に立ち寄ることも少なくなっていくのだろう。マレーの『日本旅行案内』第9版(1907)でも上記の記述と変わりはない。途中で人力車に乗り換えることが推奨されている。変化へのひとつの手がかりを与えてくれるのが、いわゆるグローブロッターひとりによる旅行記である。*Vignettes of Japan, China and America* (1914)の著者であるグリーンズ(M. B. Greaves)は、日本をさっとかすめるように観た旅行であったことを自ら認めている。旅行記のIntroductionでグリーンズは、今日の旅行者が明治初期の日本に感激した旅行者と同様の感動を味わうことは難しいと述べる。以前にはあった詩情とロマンチックな情緒は、現代の進歩と西洋化を喧伝する日本からは、もはや得られない、しかし田舎に行けば、まだその余韻が感じられる、というのがグリーンズの見方である。第1次世界大戦の開始年に出版されたこの旅行記からは、急激に変化した日本へのいくばくかの幻滅と、古い日本の幻影を探し求めるまなざしが読み取れる。

この著者が宇治に言及している箇所が興味深い。

The ricksha ride to Uji (*sic.*) and Nara is long since a thing of the past. Seldom, if ever, do tourists linger in the quaint little tea houses overhanging the river, sipping fairy cups of tea from minature (*sic.*) lacquer trays, whilst the fisherman plies from the rustic

bridge below. (14)

この時代には、もう人力車に乗って宇治と奈良を訪れるというのは遠い過去のことだと言う。旅行者はめったに宇治川のほとりの茶屋に憩うこともない。宇治橋で漁師が釣りをする姿を見ながら、小ぶりで愛らしい茶器で宇治茶を味わうこともない。ここにはパーソンズやポンティングが驚きをもって眺めた茶畑への言及もない。宇治が発していた魅力はもはや旅を急ぐ欧米の旅行者に伝わらなくなっているように読める。鉄道の発達で宇治に立ち寄りなくなったのか、それとも宇治自体が魅力を失ったのか。残念ながら目下のところ判断材料を持ち合わせていないので、ここでそれに答えることはできない。

3 現代の英語ガイドブックの中の宇治

明治時代の欧米人旅行者の関心を引いた宇治茶の文化的景観であったが、宇治は時代が下ると欧米人旅行者から訪れるべき土地として選ばれなくなっていったと推測される。では現代の宇治はどのように紹介されているだろうか。欧米人旅行者がよく利用している『ロンリー・プラネット 京都ガイド』(*Lonely Planet Kyoto*)での扱いを一つの手がかりにしよう。

『ロンリー・プラネット 京都ガイド』第4版(2008)、第5版(2012)では宇治の項で宇治茶に関するコラムを設けている。

UJI TEA: The mountains that surround the town of Uji are perfect for growing tea, and the town has always been one of Japan's main tea-cultivation centres. In fact, tea is usually the first thing most Japanese associate with the name Uji. You won't see any of the plantations unless you hire a car and drive into the mountains to the south, but you will see plenty of shops selling tea in Uji town. As you might expect, this is also a great place to try a simple Japanese tea ceremony. (126)

「宇治市を囲む山々は茶の栽培に最適であり、この町は昔からずっと日本の茶栽培の中心地であった。実際、日本人にとって「宇治」と聞けばまず茶が連想される。現在では車で南の山中に入らないと茶畑は見られないが、宇治の町中には茶を売る店がたくさんある。もちろんここは日本式の茶道を気軽に体験するにも良い場所だ。」(拙訳)

コラムではこの後、体験ができる施設を2箇所挙げている。ここでは宇治が日本の茶所であるという紹介はなされているが、同時に茶畑や茶農家が身近にないこと、茶を体験できる施設が少ないことが暗に読み取れる。明治時代の旅行記やガイドブックでの扱いとの違いは明白だ。現在、伝統的な方法で覆下栽培を行うのは、高級茶を産する一部の茶農家に限られ、宇治中心部には少

なくなっているため、観光客がその景観を目にするのは難しい。しかし宇治における茶栽培の歴史と方法が外国からの観光客に十分届いていない、あるいはそれが観光情報として重視されていない可能性がある。

『ロンリー・プラネット 京都ガイド』は1999年の初版以来、およそ3年ごとに改訂が重ねられてきた。情報が充実している点、最新の情報やトレンドを取り込んで内容を更新している点、解説文も見直しをはかっている点で、ガイドブックとして高く評価できると考える。その第6版(2015)を参照すると、第4版・第5版では‘Greater Kyoto’ (京都郊外) に分類されていた宇治が、‘Day Trips from Kyoto’ の章に分類されている。この章で主に取り上げられるのは奈良、大阪、美山町である。宇治への言及は、平等院も含めて一つのコラム内に縮小し、“Its main claims to fame are Byōdō-in and Ujigami-jinja (both Unesco World Heritage sites) and tea cultivation.” (132) として、宇治茶に関しては“tea cultivation” のみの言及となっている。

京都在住歴の長い著者によって編集される代表的な英語京都ガイドブックにおいて、宇治と宇治茶の扱いが縮小しているという事実からは、それらが海外からの旅行者の観光対象として重要視されていないのではないかと懸念される。

また『ラフガイド ジャパン』(The Rough Guide to Japan, 2011) を見てみると、茶畑と製茶過程への関心はあるが、その体験ができる機会が少ないことが暗に指摘されている。

It has become possible only quite recently to visit Uji's tea fields and tea-processing factories, and the best time to do so is in May, when the first leaves of the season, later drunk as *shin-cha* (“new tea”), are being picked. [...] are two growers which have recently started offering field and factory tours to tourists during the picking season; check the websites for details. (452)

「宇治の茶畑や製茶工場を見学できるようになったのはごく最近である。「新茶」として飲まれる茶の新芽を摘む5月が、訪れるには最適の季節だろう。[中略] (この2茶園は) 最近、茶摘みシーズンの茶畑と製茶工場の見学ツアーを始めた。詳細はウェブサイトでチェックのこと。」(拙訳)

このように『ロンリー・プラネット 京都ガイド』と『ラフガイド ジャパン』での宇治と文化的景観としての茶畑の扱いをみると、宇治茶の歴史と茶に関する景観が文化資源として十分に活かされていないという、ガイドブック編集者の認識が背後にあるのではないかと推測される。コジェンスキーの旅行記に見られた旅の満足の要素がすべて揃った宇治体験、すなわち「美しい景観を愛でる、歴史・物語に触れる、産業を知る、気持ちのよい休息を取る、名物を味わう」という、その土地の文化を構成する「ストーリー」を身近に味わう体験が欠落していることが、宇治の観光地としての魅力を十分に伝えられていない原因ではないかと推測されるのである。

現在、明治時代の欧米人旅行者の宇治体験を再現することは不可能だが、今日の英語ガイドブッ

クにおける宇治の扱いと合わせて考えると、彼らの宇治体験は文化的景観の体験モデルとして示唆するところが多々あるのではないかと考える。

まとめと今後の課題

本稿では、明治時代の旅行記とガイドブックを取り上げて、宇治茶産業がどのように文化的景観の一部として受容されたか、それがどのように変容したかについて、いくつかの例を示して考察・分析した。第1次世界大戦から第2次世界大戦後の宇治と宇治茶が欧米人にどのように認識されたか、また海外に向けてどのように発信されたかについては今後の課題となる。

明治時代に宇治を旅した欧米人旅行者は、その土地が単に美しいというだけでなく、土地の歴史と生業に結びついた文化的景観を形成していることを認識していた。しかし現代の観光にこのような認識がどれほど醸成されているだろうか。宇治を訪れる観光客は増加しても、宇治茶生産がその土地の文化的景観を形成していたという認識を持って宇治を体験する旅行者がどれほどいるだろう。抹茶スイーツとお土産だけで終わる宇治観光にしまっているとしたら、それは旅行者自身のせいだけでなく、迎え入れる側の発信力が足りないためでもないだろうか。それを旅行者の側の情報不足に帰することはできない。例えば明治時代の欧米人旅行者にとって特筆すべき営みであった覆下栽培について、その景観自体を目にする機会と、覆いをする理由を知る機会はどれほどあるだろう。また現代の英語ガイドブックにおける宇治の扱いから推測しても、宇治という土地が歴史的な奥行きをもったストーリーとして捉えづらくなっているのではないだろうか。それについては、宇治茶の歴史と生業が身近に見えにくくなっていることも原因の一つであろう。

ただ悲観的になるべきではない。すでに外国人観光客も対象にした茶摘みや茶畑・製茶工場の見学などの体験型観光に取り組んでいる茶園もある。また今日、京都府は宇治・山城地域を「お茶の京都」としてその魅力を伝えるキャンペーンを展開し、観光振興にも力を入れている。2011年からは「宇治茶生産の景観を世界文化遺産に」を目指して長期的な取組を行っている⁶⁾。冒頭に述べたように、2015年には宇治の茶に関する景観と茶産業の歴史は「日本茶 800年の歴史散歩」として、ストーリー性を重視する「日本遺産」に登録されている。今後は、文化的景観の保存・継承とストーリーの発信に、いっそうの力が注がれることを期待したい。

最後に、私たち自身が現代の生活の中に残された、あるいは新たに形成されつつある文化的景観への認識を醸成し、ストーリーとしてさらに発信すべき時代に生きていることを確認したい。

[付記] 本稿をまとめるにあたっては、研究協力者である京都府立総合資料館文献課の松田万智子氏より、江戸末期から明治時代の宇治の景観に関してご教示と資料提供をいただいたことを感

謝します。

本稿は、科学研究費基盤研究(C)「明治時代の京都を訪れたイギリス人の京都観とその思想的背景に関する比較文化研究」(平成25～27年度、課題番号25511007 研究代表者:野口祐子)の研究成果の一部として発表するものである。なお、本稿の一部は2015年3月9日開催の国際京都学シンポジウム「いっぷくどうどう—名所記と宇治茶の世界—」(京都府立大学文学部主催、於京都府立大学稲盛記念会館)での筆者による発表「宇治の名所は茶畑だった—明治の欧米人のまなざし—」の内容をもとにしている。

[注]

- (1)「文化的景観とは」文化庁ホームページ (2015年9月23日閲覧)。
<http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/keikan/>
- (2)「[日本遺産 (Japan Heritage)]とは」文化庁ホームページ (2015年9月23日閲覧)。
http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/nihon_isan/
- (3)国際京都学シンポジウム「いっぷくどうどう—名所記と宇治茶の世界—」(京都府立大学文学部主催、2015年3月9日、於京都府立大学稲盛記念会館)での筆者による発表「宇治の名所は茶畑だった—明治の欧米人のまなざし—」に関する参加者のコメントより。
- (4)平成26年度京都府立大学地域貢献型特別研究(ACTR)研究成果報告書『京都名所記の誕生—京都府立総合資料館所蔵古典籍の活用と「国際京都学」へのアプローチ—』(研究代表者:文学部 藤原英城教授)「橋姫」の段 p.28 参照。(http://www2.kpu.ac.jp/letters/hist_studies/meisyoki/pdf/japanese/japanese5.pdf 2015年9月23日閲覧)
- (5)「宇治茶の世界文化遺産登録」京都府ホームページ (2015年9月23日閲覧)。<http://www.pref.kyoto.jp/nosei/1331098394335.html>

[参考文献]

- Bird, Isabella Lucy. *Unbeaten Tracks in Japan*. Volume 2. London: John Murray, 1880. Rpt. Cambridge Library Collection. Cambridge: Cambridge University Press, 2010.
- Chamberlain, Basil Hall & W. B. Mason, *A Handbook for Travellers in Japan Including the Whole Empire from Yezo to Formosa*. Fifth Edition Revised and Augmented. London: John Murray, 1899.
- _____. *A Handbook for Travellers in Japan*. 3rd edition. New York: Charles Scribner's Sons; London: John Murray; Yokohama: Kelly. 1893. American Libraries Internet Archive. <https://archive.org/details/ahandbookfortra14firgoog>
- _____. *A Handbook for Travellers in Japan Including the Whole Empire from Yezo to Formosa*. 4th edition. New York: Charles Scribner's Sons; London: John Murray; Yokohama: Kelly. 1894. American Libraries Internet Archive. <https://archive.org/details/handbookfortrave00murr>

- _____. *A Handbook for Travellers in Japan Including the Whole Empire from Yezo to Formosa*. 5th edition. London: John Murray ; Yokohama: Kelly. 1899. American Libraries Internet Archive. <https://archive.org/details/ahandbookfortra00masoogoo>
- _____. *A Handbook for Travellers in Japan Including the Whole Empire from Saghalien to Formosa*. Eighth edition. London: John Murray, 1907.
- Greaves, M. B. *Vignettes of Japan, China and America*. Amersham, Bucks: Morland, 1914.
- Košenský, Josef. *In Japan (1893-1894)*. Trans. Miriam Jelinek. Prague: Charles University in Prague, 2013.
- Parsons, Alfred William. *Notes in Japan, with Illustrations by the Author*. London: Osgood, McIlvaine, 1896.
- Ponting, Herbert George. *In Lotus-Land Japan*. London: Macmillan, 1910.
<https://archive.org/stream/inlotuslandjapan00pontrich#page/108/mode/2up>
- Richmond, Simon. & Jan Dodd, *The Rough Guide to Japan*. Fifth edition. Rough Guides, 2011.
- Rowthorn, Chris. *Lonely Planet Kyoto*. 5 th edition. 2012. Lonely Planet.
- _____. *Lonely Planet Kyoto*. 6 th edition. 2015. Lonely Planet.
- Satow, Ernest. and Albert George Sidney Hawes. *A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan*. 1st edition. Yokohama: Kelly & Co. 1881. American Libraries Internet Archive.
<https://archive.org/stream/ahandbookfortra00hawegoog#page/n7/mode/2up>
- Scidmore, Eliza R. *Jinrikisha Days in Japan*. 1891. New York & London: Harper & Brothers, 1900.
- 山本覚馬編、*The Guide to the Celebrated Places in Kiyoto & the Surrounding Places for the Foreign Visitors*, Kiyoto: Niwa, 1873。
- 金坂清則訳注、イザベラ・バード『完訳 日本奥地紀行』第4巻、東洋文庫 833、平凡社、2013。
- コジェンスキー、ヨゼフ『ジャボンスコーボヘミア人旅行家が見た 1893 年の日本』鈴木文彦訳、朝日文庫、2001。
- シドモア、エリザ・R『シドモア日本紀行—明治の人力車ツアー』外崎克久訳、講談社学術文庫、2002。
- 野口祐子「明治時代の英語ガイドブックにおける京都へのまなざし—「文化財」という観点」『京都府立大学学術報告 人文』第66号、研究ノート、2014、131-141。
- バード、イザベラ『日本奥地紀行』金坂清則訳注、第1～第4巻、平凡社、2012-2013。
- 長谷川雅世「英文ガイドブックにみる明治・大正時代の京都の名所—ガイドブックが伝える外国人が旅した京都」野口祐子編『メディアに描かれた京都の様態に関する学際的研究—平成23年度京都府立大学地域貢献型特別研究 (ACTR) 研究成果報告書』(2012) 第5章、62-86。
- ポンティング、ハーバート・G『英国写真家が見た明治日本—この世の楽園・日本』長岡祥三訳、講談社学術文庫、2005。

(2015年9月28日受理)

(のぐち ゆうこ 文学部欧米言語文化学科教授)